

令和 6 年 度
宮崎国際大学 国際教養学部
一般選抜後期

試 験 問 題
【小 論 文】

受 験 番 号
氏 名

問題

次の文章は、文化人類学者である松村 圭一郎^{まつむらけいいちろう}さんが、日本の「働き方」について述べたものです。松村さんは研究のために海外を訪れ、多くの人がしっかり休暇をとっている姿を目のあたりにし、日本の「働き方」について考えさせられました。松村さんの意見を要約するとともに、これから日本はどのような「働き方」をすべきだとあなたは考えるか、600字以内で述べなさい。

日本は四季の移ろいを愛でる国だとよく語られる。だが、日本の「働き方」をみると、基本的には一年中、同じ均質な一定の時間の流れが前提とされているように見える。就業時間は固定的で、つねにできるだけ長い時間を集中して働くことが美徳とされている。最近、就業時間中の社員が仕事をサボっていないか、監視するツールが開発され、実際に利用されているようだ。そこには季節感も、個人ごとの「働き方」のリズムも、まったく考慮されていない。

私がエチオピア農村部で見てきた「働き方」は、日本とはまるで対照的だった。そもそも「働くこと」と「楽しむこと・休むこと」の区別があいまいなのだ。家事をしている女性たちのもとには、近所の友人や親戚がよく訪ねてくる。そして、ともに談笑し、一緒に手を動かしながら「働いて」いる。小さな乳幼児のいるお母さんも、赤ちゃんを居間に置いたまま動き回っていて、近所の女性や祖父母、兄姉などが暇つぶしもかねて一緒に遊びながら面倒を見ている。お母さんは、ときどきお乳を与えに戻るぐらいだ。「家事」も「子育て」も、ひとつの家族や親子関係のなかに閉じられていない。そして、ある人の「働くこと」と、周囲の人の「楽しむこと・休むこと」が同時に成り立っている。

エチオピアの人々の「労働」の光景を思い起こすと、フランスやドイツでも同じような場面を目にしていたことに気づかされる。スーパーのレジで店員と客が冗談を言い合い、バスで乗客の女性がずっと運転手と世間話をしている。鉄道の乗務員が停車駅のホームでタバコをふかして休憩し、制服姿の警官が路肩にパトカーを止めたまま同僚たちと笑顔で昼食をとっている。日本だと、「けしからん！」とクレームが入りそうな場面ばかりだ。

そこでは「働く」時間と「楽しむ・休む」時間が混じり合っていて、それが当然のことだと受け入れられている。むしろ「労働している時間」と「労働していない時間」が明確に区別可能だという前提自体が現実離れした想定なのだ。なぜ日本では、たとえ苦痛でしかなくても、ひとつのことに一心に集中しつづけることが、より生産的で効率的だと信じられているのか、逆に疑問がわいてくる。

二〇二一年の労働生産性の国際比較によると、日本の時間あたりの労働生産性は、長期休暇を楽しむフランスやドイツの六割ほどと、かなり低い（日本生産性本部「労働生産性の国際比較2022」）。この年、全体の順位も OECD 加盟国三八ヶ国中二九位と、データが利

用できる一九七〇年以降、もっとも低くなった。

生産性をあげるために、従業員を就業時間に監視しても、おそらく生産性はあがらない。そこには、おそらく前提の違いがある。強いられた苦行のような労働や均質な時間の使い方が生産的になるわけがないのだ。

もちろん、生産性さえあがればいい、というわけではない。なんのために働くのか、その働きがどんな社会をつくりだしているのか、本来はそうしたことのほうが重要だ。ただ課題解決においては、「答え」が間違っていることよりも、「問いの立て方」がおかしいことがよくある。日本の「働くこと」を考えると、私たちが前提にしてきた枠組み自体を疑ってみる必要がある。

エチオピアの人たちが見せてくれた「働くこと」と「楽しむこと」の混じり合った姿。それらは、私たちに別のやり方が可能かもしれない、と考えるよう促している。

SNS やビジネスチャット、オンライン会議システムなど、いつもどこにいても、「働くこと」から逃れるのが難しい環境が、着々と私たちの人生を囲い込むようになった。そんな時代のなかで、あえて労働に季節感をとりもどす。楽しみながら働き、仕事のことを忘れて、しっかり休む。日本の労働の風景になかったことを試してみると、ときが来ているように思う。

(松村圭一郎「働くこと、休むこと」による・一部省略がある)